

三人生酔

常磐津

全詞章

常磐津

本名題『節句遊恋の手習』

別題『夕涼み三人生酔』

作詞者・作曲者・初演年不詳

四季の詠めもおのづから、五つの節を代々にひく、小松のはやし竹の笛、波の鼓も春秋の、調に通ふ四つの海
静けき空のほのぼのと、通神楽に明初めて、豊年祝ふ鳥追の、声も軒端に豊かなる
海上通に見渡せば、七福神の宝船、長閑に風も富貴自在、徳若に御万歳とは御代も栄へてまします、君が千歳をうちはへて、貢七野の七草に、拍子も揃ふ梅若菜、鞠つく羽根つく
福引や、きみに床しき春遊び

頃も弥生の雛祭、柙に花をうかけし、藤の姿に桜のかさね、松の榎をたてる雛、妹背を結ぶ檜扇に
ならす合図の爪琴は、音も細殿に音信るる、しげき廊下の御簾の隙
九重香へ桜時、団扇はなびく恋風も

桃や柳のいたづらに
いろ香。

互ひに争ふて

鶏に恨みの数々も、わかれて逢ふて合せ鶏、ヤツと声かけおのが羽に、発矢と受けて妻鳥を、蹴爪にかけて鶏冠のうへ、身ぶるひ鳥なき尾かたげも、これぞ互ひの攻め鼓、鳴音羽音の
勇ましく、踏歌の節会ぞいさましく

夜風山風不二風、筑波北風に両国のサア

ツイ船公川岸を突いて下つし

素敵に船が出たぢやアねへか

名にし涼みの夕景色、三人乗りの騒ぎ船

アア暑いこつちやこつちや、イヤ又大川の涼しい事はへ、ヲヲ涼しいすずしい、イヤ同じ騒ぎでも、其方は野郎の三すくみ、彼方は三味線美婦入りぢや、へへ畜生奴
色がある、知りつつ惚れた横恋慕言出すからは何処までも、立て貫はにやならぬぞへ

エエ大分心意氣をやつつけるぜ

アレヲ有に此大盞で、ぐつと二杯呑廻しとやりませうか

や其奴はよからう

コウそんなら一つ注で下つし、と無茶苦茶酒の筒茶碗、エイアアいい氣味だ、浴るばかりの瀧呑みに
ういた機嫌の癖

と

癖

三人生酔これならん

エイ何だかむかむか癪に障つて来たぜ

ハハハ何だ癪に障つた、癪に障つたが可笑しいをかしい
コレサこれき其様に諷もない事に腹を立たり、可笑しくもない事に笑うたり、そして貴公達の顔がノヤ、六つにも七つにも見えて、其処等あたりがぐるりぐると、廻るやうでノヤ、

どうしたらよからうと思へば、何だか悲しくなつて、思はず涙がこぼれあめ、袂をしぼる計りなり
エエ篋棒奴、涼みに出へばやアがことはねへ、アレ見や向ふの船で美しいあねさんが可愛らしい手で、アレ何かすらア、エモシもしお押へならばお台を致しやせうぜ

靡ばつたりおちこちの、人目といふは知ればこそ、しつと身に添へ抱締て
ヲヤ大分俺をやすくするな

ハハハコレサこれき三人斯うして極粋なことづくしで、思ひいれぶつて洒落やうと思つて来たのに、そんなに腹を立たり泣いたりするも野暮ぢやアねへが、そつち達は酒の上が悪いと
思つたら、水の上まで矢張悪いぜ、アレ隣の船で何か始めるぜ、通り者の寐言ぢやアねへが、どう調子をあはせるぜ、送つて出やる肌薄な、姿を見れば胸迫り

ヲヲ違へねへちがへねへその胸迫りが尤もだもつともだ

コレサまた泣くか、困りもんだぜ

それだと言って、これが泣ずに居られうか、アアアア

何故よ

アレあの新内を聞くにつけ、浮川竹の苦界の身でも、実に惚れればアノ通り、わしもちつとやそつとは掛り合つて見た覚えもあれば、今の此身にエエひしと当つて熱い涙がエエ胸先へ、
どうもどうも悲しうて男泣きに此様にと、二人が袂にとり絶り

ハハハハハ

エへへへへ

ハハハ

へへへ

ハハハ

へへへ

ハハハ

へへへ

ハハハ

へへへ

ハハハ

へへへ

ハハハ

へへへ

ハハハ

へへへ

ハハハ

へへへ

ハハハ

へへへ

ハハハ

へへへ

ハハハ

へへへ

ハハハ

へへへ

ハハハ

へへへ